追　悼　の　辞

われわれ経済学部の一同が柴先生のお元気な姿に接した最後は，昭和57年７月１日の教授会の時であった．半年にわたる入院加療の効も奏せず，翌58年２月19日，温顔あふれる先生は遂に不帰の客となられた．非常に残念なことと云わねばなりません．

柴先生は，大正５年，碩学柴兼太郎氏の長男として東京都でお生まれになり，旧制第三高等学校を経て，昭和18年９月，東京帝国大学経済学部を卒業されました．しばらく民間会社に勤務されましたが，第二次世界大戦後の混乱のまださめやらぬ昭和25年８月，大阪府立商工経済研究所に入所されました．当時，研究所は，大阪を中心とする中小企業ならびに地域経済の実態調査や研究によって，大阪ひいては日本の経済復興政策の基礎を提供したと聞いております．先生が研究所に入所された経緯についてはつまびらかではありませんが，少なくとも，先生がその後大阪府立大学経済学部にうつられて書かれた中小企業ならびに産業等に関する研究ノートや著論は，明らかに，この経歴と経験が，研究者としての先生の方向を定める端著をなしたことと思われます．

昭和41年４月，本大学経済学部が創設されるとともに，先生は専任講師として迎えられ，教授としてお亡くなりになるまで，17年間の長きにわたって，本学の教育・研究の中心人物として尽力されました．教育においては「日本産業論」と「企業形態

論」を講義され，研究面では，ドラッカーを中心とする企業制度論や経営者の社会的責任について変らぬ関心を示され，企業経営の内部というよりは企業と国民経済との関連という大きい視点を追究されてきました．「研究に終着点はない」と云われますが，先生はこの大きなテーマを種々の角度からより一層深めて行こうと邁進されていたのではなかろうかと推察しますと，先生はもとより本学にとっても，その早すぎる御逝去はまことに惜しまれてなりません．

先生の人柄は，きわめて温厚・誠実で，先生に接したものは誰でも，その温顔に包まれるような，そのような風格を備えられ，その真摯な学究態度にはわれわれは常に教えられること多いものがありました．

ここに，われわれは，謹んで先生の御冥福を祈り，その徳を偲んで，追悼論文集を捧げる次第です．

昭和59年1月23日

経済学部長

奥田順一